巻頭言

メディアセンター長
立教大学理学部　教授　枝元一之

前回に引き続き、今回のメディアセンター年報の巻頭言においても、昔話をすることをお許し頂きたい。今のセンター長は、歳なものですから。今回は、前回よりさらに時代を遡り、私が学生時代の話である。およそ昭和50年台を舞台とする話であるから、センター員にはまだ生まれていなかった人が多いかもしれない。

当時の学生街の風物詩にして、現在では全く絶滅した風景の一つに、夜の電話ボックスにできる順番待ちの長い行列がある。携帯電話が登場する、何十年も前の話である。当時の学生は皆つつましく、下宿（この言葉自体、今では死語であろうか）の自室に電話を引いているものなど、私の知る限り一人もいなかった。ほとんどの下宿屋には、下宿人のための共用の電話が、大抵の場合入り口の近くに置かれていたが、いかに若者だとて、あるいは若者なればこそ、そんなところでは話せない用件というものがあるものである。そのような学生が、夜になるとこぞって小銭を握りしめて電話ボックスに向かうため、夜毎電話ボックスには長蛇の列ができていた。私とて、当時一応は若者の端くれであったので、時には電話ボックスでないと話せない用件が生じることもあった。私は、列に並ぶということが我慢できない性質なので、目指した電話ボックスに人が並んでいると、そこは避けて比較的すいているところを探し回るのが常であった（当時250 ccのオートバイに乗っていたので、機動力はあったのです）。こんな生活を、学部大学院通じて 9 年間送ったので、私は大学と下宿を結ぶ線上、およびそこから数km以内に、どこに電話ボックスがあるかを完全にそらんじていた。

当時、女の子と仲良くなろうと思い、休みの日に会おうとすれば、戦いは八方手をつくしてその連絡先を知ることから始まる。さらに昔であれば手紙など送るのかもしれないが、さすがに私のころは電話世代であった。連絡先を記したメモを握りしめて電話ボックスに向かうとき、電話ボックスでメモをにらんでダイヤルしているとき、コール音を聞いているとき、やがてコール音が切れてガチャリと電話がつながるとき、その時その時の緊迫感は今となっては人生の味ともいえるものであるが、当時は無論それを楽しむ余裕はない。スマホ世代は全く通信事情が違っていると想像するが、形こそ違え今の若者も、むかしと本質的に同様の緊迫した戦いを日々繰り広げているに違いない。首尾よく女の子が電話に出た場合、まずは一見さりげない、その実過去数時間にわたり頭の中でシミュレーションしつくした世間話をしたのち、本題に入ることになる。こちらも緊迫しているが、むろん一方の電話口の相手もそれなりに緊迫している。その緊迫が、会ってもいいかなという迷いによるものか、あるいは結論ははなから決まっていてどのように断ろうかという迷いによるものかが問題であるが、残念ながら私の場合は後者であることが多かったようである。

したがって、その後肩を落として電話ボックスを去るという結末が多かったが、電話ボックスであれば縁起の悪いものはその後使わなければすむが、携帯電話は負け戦のたびに捨てるわけにいかないので、ある意味今の若者は気の毒である。もっとも、9 年間も負け戦を続けると縁起の悪い電話ボックスが増えていき、選択肢が減ってそれはそれで困ったものであった。

公衆電話は、機器としてはダイヤルをジーコジーコと回す形式に代わってプッシュホンが主流になった。投入するものも現金に加えてテレホンカードなるものが現れ、一時おおいに出回ったが、その後携帯電話の登場とともに公衆電話自体が急速に姿を消していった。その後、携帯電話は一時期のポケベルとの共存時代を経て、現在のスマホ全盛の時代となった。時代が革新されるまでの期間は確実に狭まっており、かつての公衆電話の悠久の時代ののちは、目まぐるしい革新が続いている。

以上の話を、情報分野における技術革新の急進性に関連付けてメディアセンターの話に持っていく予定であったが、予定を変えてもう少し雑感を続ける。私の学生時代は PC が普及し始めた時代で、理系の研究室でも PC を持たないところがあった。現に、私の所属した研究室では、「PC を買う金があったら、それをハードである開発装置に充てる」と言って PC を買ってくれなかった。また、現在では常識となっている PC を用いたデータの解析を進言しても、「データの加工はサイエンスではない」と言ってはねつけられた（これはある意味今でも卓見である）。それで充分最先端の研究をしていたので、今にして思えばのどかな時代であった。私が就職する頃には、さすがに PC のない研究室はなくなったと思うが、その頃は PC ならびにその関連機器の管理は 100%自己責任であった。大学にメディアセンター、すなわち情報関連部局が必要となってきたのは、PC がネットでつながり始めた頃かと想像する。おそらく、これが画期であった。昨今では、ネットにつながっていないと無人島に流されたようなものであり、学会の申込も論文の投稿もできない。

センター長を拝命して 2 年余りとなるが、実のところこの間一貫して驚き続けている。メディアセンターの業務がいかに大学の活動の死命を制するものであるか、またいかにその業務の量が膨大であるか、現在進行形で認識を深めているところである。業務の膨大さは、１つには情報システムのような複雑系ではバグは避けられず、かつその対応に迅速さが求められることによると思われる。また、私のところにも cc で送られてくる、センターへの質問、要望の多さも驚きである。おそらく、情報機器は必需品であるにもかかわらず、一般家電製品ほどには操作が単純でなく、スイッチひとつで思い通り動かせるものでないということと、情報分野において加速する技術革新のテンポにキャッチアップするのが、専門家以外にはつらい状況になりつつあるのがその原因と考えられる。情報システムの複雑化と、その革新テンポの早まりは、今後加速することは必須なので、今後メディアセンターの業務の重要性と量の増大は避けられない。大学としての財政健全化への取り組みの重要性は充分認識しているつもりであるが、メディアセンターの担う業務の重要性と今後避けられない膨大化を考えると、その拡充はどうしても必要かと考えている。